

タイプⅠ

問 次の文章は、川端康成の「日向」という作品の全文です。よく読んで、この小説の続きを（おおよそ、2000字から4000字程度で）自由に創作してください。

二十四の秋、私はある娘と海辺の宿で会った。恋の初めであった。

娘が突然、首を真直ぐにしたまま袂を持ち上げて、顔を隠した。

また自分は悪い癖を出していたんだと、私はそれを見て気がついた。照れてしまつて苦しい顔をした。

「やっぱり顔を見るかね。」

「ええ。―でも、そんなでもありませんわ。」

娘の声が柔かで、言うことが可笑しかったので、私は少し助かった。

「悪いかね。」

「いいえ。いいにはいいんですけど―。いいですわ。」

娘は袂を下ろして私の視線を受けようとする軽い努力の現われた表情をした。私は眼をそむけて海を見ていた。

私には、傍にいた人の顔をじろじろ見て大抵の者を参らせてしまう癖がある。直そうと常々思っているが、身近の人の顔を見ないでいることは苦痛になつてしまっている。そして、この癖を出している自分に気がつく度に、私は激しい嫌悪を感じる。幼い時二親や家を失つて他家に厄介になつていた頃に、私は人の顔色ばかり読んでいたのになかろうか、それでこゝうなつたのではなからうかと、思うからである。

ある時私は、この癖は私がひとの家に引き取られてから出来たのか、その前自分の家になつた時分からあつたのかと、懸命に考えたことがあつたが、それを明らかにしてくれるような記憶は浮んで来なかつた。

―ところがその時、娘を見まいとして私が眼をやつていた海の砂浜は秋の日光に染まつた日向であつた。この日向が、ふと、埋もれていた古い記憶を呼び出して来た。

二親が死んでから、私は祖父と二人きりで十年近く田舎の家に暮らしていた。祖父は盲目であつた。祖父は何年も同じ部屋と同じ場所に長火鉢を前にして、東を向いて坐つていた。そして時々首を振り動かしては、南を向いた。顔を北に向けることは決してなかつた。ある時祖父のその癖に気がついてから、首を一方にだけ動かしていることが、ひどく私は気になつた。度々長い間祖父の前に坐つて、一度北を向くことはなからうかと、じつとその顔を見ていた。しかし祖父は五分間毎に首が右にだけ動く電気人形のように、南ばかり向くので私は寂しくもあり、気味悪くもあつた。南は日向だ。南だけが盲目にも微かに明るく感じられる

のだと、私は思つてみた。

―忘れていたこの日向のことを今思い出したのだつた。

北を向いてほしいと思ひながら私は祖父の顔を見つめていたし、相手が盲目だから自然私の方でその顔を上げしげ見ていることが多かったのだ。それが人の顔を見る癖になつたのだと、この記憶で分つた。私の癖は私の卑しい心の名残ではない。そして、この癖を持つようになった私を、安心して自分で哀れんでやつていいのだ。こう思うことは、私に躍り上りたい喜びだつた。娘のために自分を綺麗にして置きたい心一ぱいの時であるから、尚更である。

娘がまた言つた。

「慣れてるんですけど、少し恥かしいわ。」

その声は、相手の視線を自分の顔に戻してもいいと言う意味を含ませているように聞えた。娘は悪い素振りを見せたと、さつきから思つていたらしかった。

明るい顔で、私は娘を見た。娘はちよつと赤くなつてから、狡そうな眼をしてみせて、「私の顔なんか、今に毎日毎晩で珍らしくなくなるんですから、安心ね。」と幼いことを言つた。

私は笑つた。娘に親しみが急に加わつたような気がした。娘と祖父の記憶とを連れて、砂浜の日向へ出てみたくなつた。

タイプⅡ

問 「平安朝文学と宮廷社会」の関係について、（特に自分の関心を抱いた事柄を中心に）詳しく調べ、レポートとして（おおよそ、2000字から4000字程度で）まとめてください。

補足です。

〈タイプⅠ、創作への助走的準備として〉

語り手の「私」は、他人を平気でしげしげと見る「癖」があり、恋人である「娘」を恥かしがらせています。この時の、ふたりの心の内は？

「私」は、この自分の「癖」のことを、他家に厄介になっていた頃、他人の顔色ばかり窺っていたゆえの、「卑しい心の名残」と思っていた。しかし、娘を氣遣って海の砂浜に眼をやっているうちに、実はその「癖」は、盲目の祖父を介護していた時に身についたものだったと、気づく。過去の「日向」の記憶が、「癖」をめぐる忌まわしい思い込みから彼を解放した。「私」は、解放感に満たされている。

「娘」は「私」が自分を見つめるのは、相手の自分に対する愛情の表れと単純に信じ、ふたりの楽しい未来を思い描いている。

すなわち、

A・二人は共に上機嫌です。娘の最後の台詞に「親しみが急に加わったような気がした」ともある。が、その内実には、微妙なズレもあるようです。

B・また、冒頭「二十四の秋、私はある娘と海辺の宿で会った。恋の初めであった。」云々は、ふたりの将来へのなにがしかの暗示でもありそう。

※ このタイプⅠ問題は、「自由に創作して」もらう問題です。その採点基準に或る程度の主観性が伴われてくることは、避けがたいことと予測しています。

しかし同時に、或る「小説の続きを」という注文が付いている問題でもあります。「続きを」という以上、或る「小説」と、提出された課題文との間の、内的関連性はどうなっているか、或る「小説」を、どのレベルで解釈しているか、等々の面では、厳正な客観的な採点基準も存在します。この点を忘れないでください。

出題者にとっても、採点者にとっても、冒険的要素を大いに含んだ問題です。